



ENCYCLOPEDIA  
NIPPONICA  
2001

ENCYCLOPEDIA  
NIPPONICA  
2001

---

## 日本大百科全書 23

---

©SHOGAKUKAN 1988  
1988年9月1日 初版第一刷発行  
定価 7,800円

---

編集著作 相賀 徹夫  
出版者

発行所 小学館

郵便番号 101-01  
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1  
振替 東京 8-200番  
電話 編集・東京03-230-5620  
業務・東京03-230-5333  
販売・東京03-230-5739

---

印刷所 凸版印刷株式会社

---

本文 (特抄百科用紙) 王子製紙株式会社

口絵 (特抄アート紙) 三菱製紙株式会社

表紙 (特製クロス) ダイニック株式会社

---

製本 凸版印刷株式会社  
若林製本株式会社

---

- \* 本書に掲載した日本関係地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図、5万分の1地形図、20万分の1地勢図、2万5千分の1土地利用図を使用したものです。
- \* 造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。
- \* 本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan

ISBN4-09-526023-8



東山魁夷『潮音』部分



東山魁夷画『潮音』  
1966年（昭和41）130.0×218.0cm

荒磯に波は寄せ、波は退く。  
白い泡模様が浮かび、消え、また浮かぶ。  
この永劫の鼓動。

（東山魁夷・文）

## 外国語の片仮名表記

何ということもなしに、ある独和辞典で中部ドイツの都市ワイマルの語を引いてみた。「Weimar [vaimar]」〔固〕ワイマール（東独南西部イルム川河畔の都市）」とあったので、少し驚いた。Weimarの発音は「ヴァイマル」であって「ワイマール」ではない。（ここでは「ヴァ」と「ワ」とを同一視する。）ところが、大抵の日本人は「ワイマール」とaを長母音として発音する。なぜ原語通りに「ワイマル」と云わないのか。解らない。一体に、われわれにはドイツ語の最終綴りに含まれている母音（短母音）を長母音として発音する癖があるようである。Elisabethは正しくは「エリーザベト」であるのに、「エリザベート」と発音する。Gregor（人名）も「グレーゴル」と云わずに「グレゴール」と発音する。Gustav（人名）も「グスタフ」と云わずに「グスターフ」と云う。（その癖Adolfを「アドルフ」とは発音せずに「アドルフ」と云う。）Romantik（ロマン主義）を、「ロマンティック」と正しく云わずに「ロマンティック」とiを長母音にしてしまう。

永年外国語（独語、英語）とつき合ってきた私がつとも不快に、不可解に思うのは、ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォ（va, vi, vu, ve, vo）をバ・ビ・ブ・ベ・ボ（ba, bi, bu, be, bo）と表記することである。Venice（ヴェニス）はいつも「ベニス」と表記される。ところがv音とb音とは全く相異なる字音である。ひょっとして「ベニス」が「ペニス」と誤植されて、シェイクスピア『ペニスの商人』となったりしたら少し穏やかでない。

英語の片仮名表記でも、aやoという母音が二音（二音価）に発音されなければならない場合に一長母音として表記されることが多い。たとえば「ベースボール」baseballは必ず「ベースボール」と表記される。同様にspaceが「スペース」ではなしに「スペース」、paceが「ペース」ではなしに「ペース」と書かれる。elevator（エレベーター）が「エレベーター」になってしまふ。only（オウナリ）が「オンリ」になる。socialism（ソシヤリズム）が「ソーシヤリズム」になる。

外国語の発音を日本語の片仮名で正確に表記するということは、厳密に云えば、殆ど不可能に近いということは認めざるを得ないとしても、その際もう少し神経質であってもいいのではなからうか。

高橋義孝

（高橋義孝）

装 丁

亀倉雄策

本扉／書

青山杉雨（連作書体のうち、清時代、趙之謙書法による行書）

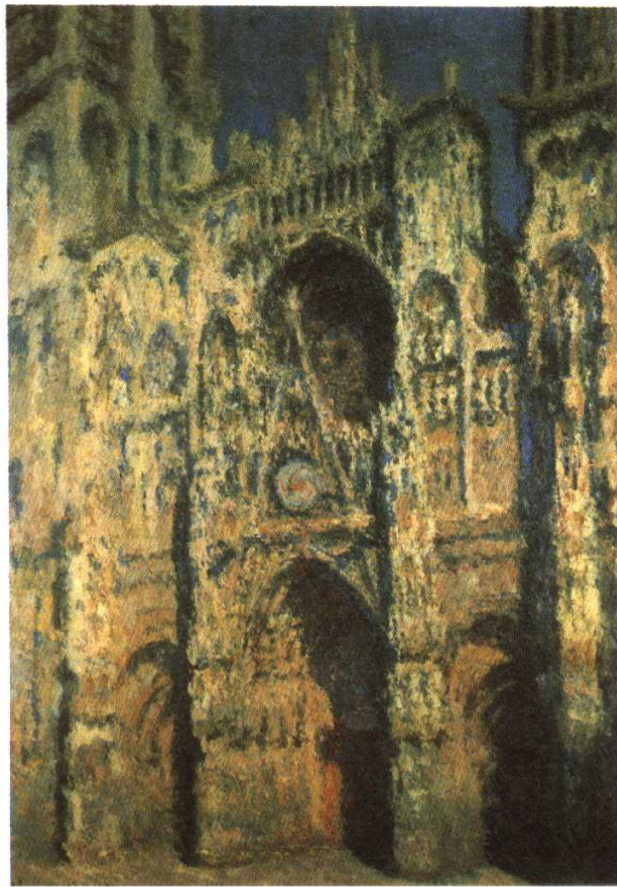
巻頭口絵

東山魁夷

本文五十音題字

木元壽美江

# もね



## モネ

〔上右〕『庭の女たち』 1866-67年 油彩 256×208cm パリ オルセー美術館  
初期の作品。マネの『草上の昼食』に感銘し、1865年同名の大作を試みるが未完に終わり、翌年同じ意図をもつ本作品を描いた。マネの明るい色彩に感化を受け、自然の光を浴びた人物を生き生きと描いている。4人の女性は後年モネの妻となるカミーユが一人でポーズをとった  
〔上左〕『ルーアン大聖堂、日を浴びる』 1894年 油彩 107×73cm パリ オルセー美術館  
1892年から94年までに20点のルーアン大聖堂の連作を制作、大聖堂に当たる光が朝から日没に至るまで刻々と変化するその瞬間をとらえようとした



『黄昏、ベニス』 1908年 油彩 74×93cm 東京 ブリヂストン美術館(石橋財団)  
モネはベネチアへ二度旅行し、その風景を描いた多くの連作を残している。モネの描くベネチア風景は光の充満した眩惑的な世界である。揺らめく大気、拡散する光、それを映す海面、建物の美しいシルエットによって壮大な風景画が描かれている

モネ Claude Monet (一八四〇—一九二六) フランス印象派の代表的な画家。一月一日パリに生まれる。五歳のころ一家はル・アーブルに移住し、彼はこのセーヌ河口の港町で少年時代を過ごす。初め町の名士たちを描いたカリカチュアで評判を得たが、風景画家ブーダンと出会い、決定的な影響を受ける。モネはブーダンから油絵を学ぶとともに、戸外で風景や海景を描くよう促され、以来、風景画が彼の第一の関心事となる。一八五九年にパリに出、六二〜六四年シャルル・グレールのアトリエに通う。ここでバジール、シスレー、ルノアールといった後の印象派の画家たちと知り合い、四人はとき

おりフォンテンブローの森で制作をともにした。また六二年にはル・アーブルの近くでオランダの風景画家ヨンキントと出会い、水や大気や光の描写に関して大いに感化を受けた。六五年のサロンに二点の海景画が入選、翌六六年のサロンでも二点の作品が入選する。彼はまたこの時期、戸外に人物を配した構成にも関心を抱き、大作『庭の女たち』を直接戸外で仕上げようとさえした。この作品は六七年のサロンに落選の憂き目をみる。モネはますます光の効果や水の反映に敏感になり、色調も六〇年代末にはいっそう明るさを増した。七〇年プロイセン・フランス戦争が勃発すると難を避けてロンドン



晩年の住居、ジベルニーの睡蓮の池の前に立つモネ

に渡り、同じくこの地に来ていたドービニーを紹介して画商デュラン・リュエルを知る。  
一八七一年末、フランスに戻ったモネは、パリ郊外のセーヌ河畔の行楽地アルジャントウイユに居を構え、いまだ田舎じみた様相をとどめると同時にしだいに近代化・工業化の波に洗われつつあったこの地のさまざまな情景を、自発性に富んだ筆致と光に満ちた色彩で描き、印象派の一つの典型的なありようを示した。彼は自然を変化する相のもとに記録しようと、あるときはアトリエ仕立ての舟をセーヌに浮かべて描くこともあった。七四年にはピサロらとともにサロンに対抗して独立のグループ展(いわゆる印象派展)を組織し、そこに出品した作品の一つ『印象―日の出』(図ト印象主義(別刷))から印象派なる呼称が生まれた。彼は続く四回のグループ展に作品を送るが、残る三回の印象派展には出品を見合わせている。七八年の初頭までアルジャントウイユにとどまったモネは、同年セーヌを下ってベトウイユに移り住み(一八六八〜八三)、八三年にはさらに下ってジベルニーに居を構え、ここが彼の終焉の地となる。  
一八八〇年代、モネはノルマンディーや地中海沿岸、中部フランスやブルターニュのペリール島など各地を盛んに旅行し、劇的な構図を好んで描いた。またこの時期から経済的安定を得、成功への道を歩むようになる。九〇年代に入ると頻りに旅行することはやめ、同一のモチーフを扱いながら時間の推移につれて描き分ける連作に取り組み、「積み藁」(一八八〇〜八二)、「ポプラ」(一八八二)、「ルーアン大聖堂」(一八八三〜八四)のシリーズが生まれた。また九三年にはジベルニーに睡蓮の池を造成し、九五年ごろから「睡蓮」の連作を開始する。モネはつねに自然を前に、その移ろいゆく瞬間の様相をとらえようとした。しかし、彼の後期の作品では、現場のみ

ならずアトリエでの制作もしいにその重要度を増してゆく。彼はすばやく容易に達成できるものには満足せず、自らの意図する瞬間の効果求めて幾度となく絵に立ち戻り、アトリエでその仕上げを行った。また連作では個々の作品の相互の関係がアトリエで調整され、全体が一つの統一あるものに仕立て上げられる。最晩年、友人で政治家のクレマンソーの勧めで睡蓮の大装飾画に着手し、それはやがて国家に寄贈され、パリのオランジェリー美術館に設置された。一九二六年二月五日没。ジベルニーの家と庭園は一九八〇年からモネ記念館として、春から秋に公開されている。〈大森達次〉

W・ザイツ著、辻邦夫訳『モネ』(五六・美術出版社)▽黒江光彦編『現代世界美術全集2 モネ』(九七〇・集英社)▽木島俊介編『現代世界の美術1 モネ』(九六五・集英社)▽G・ジェフロワ著、黒江光彦抄訳『クロード・モネ——印象派の歩み』(九七四・東京美術)

モネ Jean Monnet (一八八八-一九七九) フランスの経済テッククラート。フランス南西部コニャック市の生まれ。酒造業者の子として早くから海外での売り込みに従事した経験を買われて、第一次世界大戦中のフランスの海外物資買付けを担当して活躍した。戦後は国際連盟事務局次長(一九一九-二二)を務めたほか、多くの国際機関に経済専門家として参加した。第二次大戦に際してはふたたび英仏のため軍需物資買付けに奔走する一方、ドゴールの国民解放委員会に参加し連合国間でのドゴールの地位向上に寄与した。大戦後は「モネ計画」ともよばれたフランス経済近代化計画の立案と実施に貢献した(二五七-五)ばかりでなく、ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体創設を目ざして一九五〇年に発表された「シューマン計画」の立案にも参画し、共同体の初代議長(一九五三-五五)を務めた。ロベール・シューマン外相と並んでヨーロッパ統合の最大の功労者。著書に『回想録』(一九五六)がある。〈平瀬徹也〉

MONEX モネックス Monsoon Experiment の略で、モンスーン実験観測計画のこと。アジア南部に恵みの雨をもたらしたり、また干魘を生じさせたりするモンスーン(季節風)の機構を解明するのが目的で、地球大気開発計画(GARP)の一環として行われた。アジア海上空の逆転層と低層ジェット気流、お

よびベンガル湾のモンスーン低気圧と対流圏中層の擾乱、また、南シナ海の中規模擾乱などをおもな対象とし、これらの海面水温、風の鉛直構造、降水、熱収支などが一九七八年一月から翌年八月まで観測された。〈安田敏明〉

モノロン島 Ostrov Moneron 南樺太(サハリン)南部沖合いにある海馬島の別名。↓海馬島

物 もの 私法上は権利の客体としての物をいう。民法の起草者は物の定義に際し、物権(典型的には所有権)を中心に考えたので「本法ニ於テ物トハ有体物ヲ謂フ」と規定した(八五条)。無体物、たとえば物権や債権などの権利、発明、著作などは民法上物とはされないが、財産的価値を有し取引の対象ともなりうるので、権利の客体としては物に準じて取り扱うことが必要となる(特許権、著作権などは無体財産権といわれる)。

民法第八五条の有体物とは法律上排他的支配の可能性があればよいとされ、電気・熱などのエネルギーもこれに含まれると解されている。刑法第二四五条も窃盗罪につき電気を財物とみなす、と規定した。支配可能でなければならぬので、日、月、空気、海洋は含まれないが、漁業権、公有水面埋立権の認められる一定区画はここにいう物といえる。また排他的な支配が可能でなければならぬので、原則として独立した一個の物であることを要する(一物一権主義)。土地は一筆の土地が一個の物となり、建物などの合成物は全体として一個の物となる。これに対して土地の一部である山林の立木や未分離果実が独立して物権の客体とされ、工場の施設・設備が一括して一個の抵当権の客体とされることがある。さらに企業全体、あるいは在庫商品(集合物)が一個の担保物権の客体とされることもある。

物は取引の場面に応じ、動産・不動産、主物・従物、元物・果実、特定物・不特定物ないし種類物などに分類される。↓公物 ↓公共用物 ↓公用物

モノー Gabriel Monod (一八七二-一九七二) フランスの歴史家。ル・アーブルに生まれる。パリ大学を卒業後、高等師範学校の助手を経て、教授に就任。学界の世話役を演じ、一八七六年に『ルビュ・イストリック』(歴史評論誌)を創刊。同誌は正統史学の主流として、フランスのみならず、諸外国の歴史家をも会員に吸

取し、アカデミスムの牙城を形づくった。手堅い考証や史料操作や事実の検証に基づく論文のほか、学界動向や書評を載せ、没後現在に至るまで、各国の史学者に問題意識や論題を提供し続けている。モノーの専門は中世史で、主著に『メロピング史の史料批判』二巻(一八三-八五)がある。そのほか『ジュール・ミシュレ』二巻(一八七)や『歴史の巨匠 ルナン、テーヌ、ミシュレ』(一九〇)をはじめ、一九世紀の史家の評伝をも何編か残し、史学史に貢献した。どの評伝もじみで堅実、史料的には精密でも生彩に欠け、とくに史家の内観にまで立ち入って世紀の歴史活動の必然条件をえぐりだす労に欠ける。〈金澤 誠〉

モノー Jacques Lucien Monod (一九〇一-一九七九) フランスの分子生物学者。ソルボン大学に学ぶ。アメリカ留学後、一九三七年大腸菌の二種類の糖に対する二段生育(ジオキシ)の現象をみだし、適応酵素の研究を開始した。第二次世界大戦中はパルチザンに参加して闘う。四五年バスツール研究所に入所し、ルウヴ オフ André Michael Lwoff (一九〇一-)のもとで大腸菌のβ-ガラクトシダーゼ生成の研究に取り組む。その後、誘導物質存在下の酵素の生成を遺伝的に解析して、六一年ジャコブとともにオペロン説を提出した。これはタンパク質生成の遺伝子レベルでの制御機構の存在を示すものであった。ついで六三年には、アロステリックタンパク質の概念を提出し、タンパク質の構造変化に伴う制御のシステムを示した。六五年、ジャコブ、ルウヴとともにノーベル生理学医学賞を受けた。七一年、バスツール研究所所長に任命された。著書『Le hasard et la nécessité』(一九七二)邦訳『偶然と必然』は広く生物学から哲学にわたる問題を提起し、各国で大きな反響をよんだ。そのなかでモノーはすべての生命は、遺伝子の無方向な突然変異(偶然)とその選択(必然)の結果であり、われわれ自身この広大な宇宙にあって、まれな、孤立した、無目的な存在であり、自らの価値を選びとっていかねばならないと述べた。〈石館三枝子〉

J・モノ著、渡辺格・村上光彦訳『偶然と必然』(一九七三・みすず書房)

モノアラガイ [物洗貝] Radix auricularis japonica 軟体動物門腹足綱モノアラガイ科の巻貝。北海道から九州に至る日本全国に池や沼、水田などにすむ淡水産種で、水草



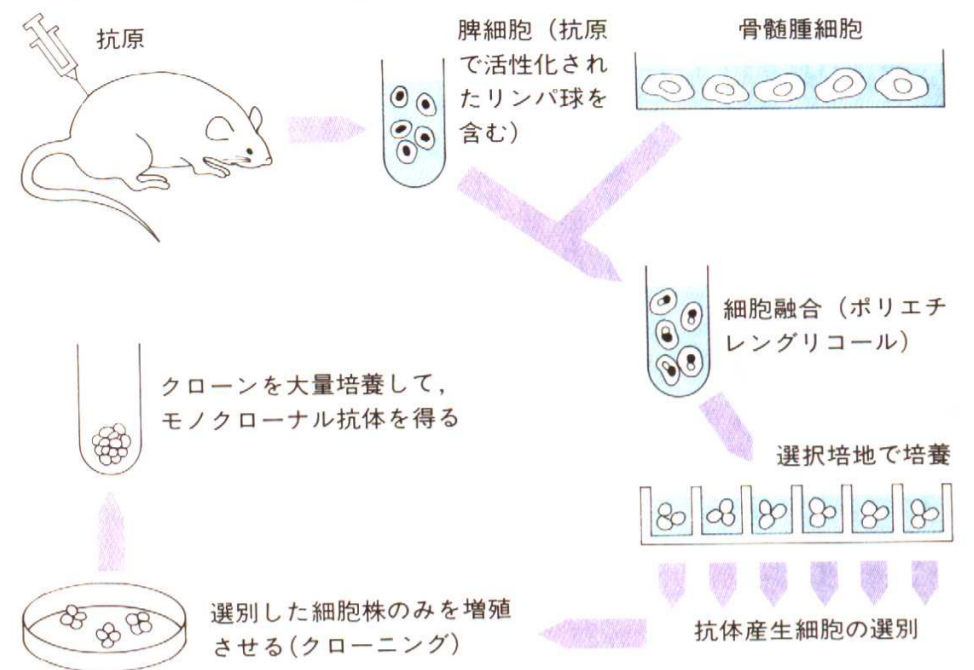
モノアラガイ [左]貝殻 [右]卵嚢はゼラチン質の短い紐状をしている

などに付着している。殻高二五、殻幅二〇に達し、全体は卵形で、薄質半透明で飴色。螺層は四階あるが、体層は非常に大きく、殻高の五分の四を占め、殻口は広い。殻口外唇は薄く、老成すると外側に反る。軸唇には薄い滑層がのっけていて、内唇の下ですこしねじれる。触角は広い三角形で、基部に目がある。外套膜の上に大小の黒い斑紋があるのが、薄い殻を透かして見える。夏季に、ゼラチン質の短い紐状の卵嚢に入れた卵を、水草の上や水槽の壁面などに産み付ける。有肺類であるから水面近くにきて空気呼吸をするが、幼貝の時代には水中だけにすむ。ウシやウマなどに寄生する肝蛭などの中間宿主である。最近では移入種のサカマキガイ Physa acuta にニッチ(生態的地位)を奪われた感があり、都会地にはむしろ少なくなった。

よく似たヒメモノアラガイ Bakersymnaea viridis は殻高一〇ぐらゐで小形、殻口は本種ほど広ならず、殻の色も黄褐色でつやがある。モノアラガイ同様肝蛭などの中間宿主になる。また、奄美諸島以南にすむモノアラガイ R. a. surinchoei は殻がずっと細長く、したがって殻口も長く、軸唇のねじれが弱い。〈奥谷喬司〉



モノクローナル抗体／作製法



血の時期が異なっても血清の抗体組成は異なる。モノクローナル抗体は一個の抗体産生細胞が増殖して生じた均一な細胞群によって生産された抗体で、特定の抗原決定基のみを認識する均一な抗体である。

モノクローナル抗体の大量作製法は、一九七五年にイギリスのケラー G. Köhler とミルスタイン C. Milstein により確立された。その原理は、免疫動物から分離した抗体産生細胞を腫瘍細胞と融合させるもので、これにより抗体産生能と細胞増殖能を合わせもつ細胞を得ることができる。融合細胞を大量に培養すれば、大量のモノクローナル抗体の入手が可能である。免疫動物としてはマウスがよく用いられ、抗原を注射したマウスの脾細胞を分離し、ポリエチレングリコールを用いてマウスミエローマ細胞（骨髄腫細胞）と融合させる。これを抗体産生細胞ハイブリドーマという。ハイブリドーマを一個ずつクローニング培養し、抗原・抗体反応を用いて選別し、一種類の特異抗体のみを生産する細胞クローンを得る。こうしてモノクローナル抗体を調製する。モノクローナル抗体は、細胞に微量に存在する物質の検出や局在性の研究に必須であり、病因の探求などに広く応用されている。

選別した細胞株のみを増殖させる（クローニング）

ハイブリドーマという。ハイブリドーマを一個ずつクローニング培養し、抗原・抗体反応を用いて選別し、一種類の特異抗体のみを生産する細胞クローンを得る。こうしてモノクローナル抗体を調製する。モノクローナル抗体は、細胞に微量に存在する物質の検出や局在性の研究に必須であり、病因の探求などに広く応用されている。

物言語 ものげん thing-language 論理

実証主義の指導者カルナップの用語。感覚と現象物に對立する。われわれを取り巻く知覚可能な事象について語る場合、その適用のために科学的な手続を必要としない日常生活で使われる用語のこと（たとえば「重い」は物言語に属するが、「重量」は属さない）。カルナップによれば、科学言語によって記述される文（物理学、生物学、心理学等々の命題）はすべて、物の観察可能な性質や物の間の観察可能な関係を記述する物言語の文に還元可能だとされ、この立場は物理主義とよばれる。それに対し、科学言語はすべて感覚と現象物に還元可能であると主張するのが現象主義である。ウィーン学団の内部では、一九三〇年代の初頭に現象主義の立場を

るうち、絶世の美女をみつめて言い寄った。逃げ回るのを追って、女の奉公する豊前守の邸へまで押しかけ、ついに思いを遂げた。女も、太郎が姿に似ず和歌の道をも解するの心に許し、二人はともに信濃へ下って富貴に榮え、のちには神と祀られた。太郎は実は仁明天皇の末孫であったという。民間説話を種にした作品らしいが、全編に明るい笑いが漂っていて、中世末期の実力主義の世相を反映した佳作である。

市古貞次校注『日本古典文学大系38 御伽草子』（一九五八・岩波書店）▽信多純一著『松蔭国文資料叢刊4 古本物くさ太郎』（一九七六・同書刊行会）

モノクローナル抗体 — monoclonal antibody ただ一つの抗原決定基のみを認識する純粋な抗体をいう。単クローン抗体、単クローン抗体ともよぶ。一個の抗体産生細胞は一つの抗原決定基のみを認識して均一な抗体を生産するが、天然の抗原は複数の異なる抗原決定基をもつので、天然の抗原を動物に注射して得られる免疫血清には多様な抗体が混在している。被抗原投与個体が異なっても、採

堅持するシュリックと物理主義を奉ずるカルナップやノイラートとの間に「プロトコル命題論争」がおこり、その結果物理主義の側が優位にたった。しかしカルナップのうちに、物言語をプロトコル命題として受け入れるか否かは、理論的問題ではなく実践的選択の問題であるとす「寛容の原理」を承認するに至る。↓プロトコル命題

野家啓一

カルナップ著、永井成男・内田種臣訳『カルナップ哲学論集』（一九七〇・紀伊國屋書店）

モノコード monochord 一本の弦を張り、その振動を利用する楽器、器具。モノコードともいう。弦鳴楽器の始祖ともみられるべきこの種の楽器は、アジアやアフリカの楽弓や一絃琴をはじめとし世界各地でみられるが、ヨーロッパでもすでに紀元前五世紀の古代ギリシアの音律論のなかに記述がある。これはピタゴラスの発明といわれるもので、共鳴器の上に一本の弦を張り、駒を動かして弦長を変え、求める音高を得る。中世以降、楽器というより正しい音程や基準音を示すための音律測定具として用いられ、近代の電氣的・電子的測定機器が実用化される一九世紀末までは、演奏現場、教育、音楽研究などの領域で使われた。また中世後期以後は複数の弦で和音も奏せるもの（ポリコード poly-chords）もつくられた。↓一絃琴（川口明子）

物差し ものさし 物の長さを計る器具の総称。物差しは物を差し計る意である。人類が最初に使い始めた計器で、また今日でも広く使われている。普通、木、金属または骨などの板または棒に目盛りをつけたもの（直尺）をいうが、両端間の長さを基準とした端面尺もある。金属や繊維製のテープに目盛りをつけて巻き取れるようにしたもの（巻尺）や、紐や縄に単位長さごとに標識をつけた巻尺は間縄ともよばれる。また単位長さの針金を両端の環でつなぎ合わせた測量用の物差しは連尺またはチェーンともよばれる。直尺を二つ直角に組み合わせた金属製の建築用の物差しは曲尺、差し金、まがりかね、かねじやくなどよばれるが、これには本来の直尺のほかに、建築に必要な寸法や角度を割り出す特別な目盛りがついている。直尺の一端に当て板を設け、別に直尺に沿って動く遊標を設け、この間に物を挟んで計るものを挟み尺とい

い、計る対象物によって特別につくられたものは玉尺、ロープ尺などと用途の名でよばれるこ

とがある。挟み尺の遊標の部分に副尺をつけ、主尺の目盛りを一〇分割あるいは二〇分割して読み取れるようにしたもの（ノギス）という。マイクローメーター、ダイヤルゲージなども目盛りをもつ長さを計る道具であるが、これらは一般に物差しとはいわず測定工具あるいは精密測定器の分類に属させている。両端面の間の寸法を精密に仕上げたバーゲージ、ブロックゲージも同様である。

物差しはまた古来材料によってよばれるものがあった。竹尺、鉄尺、象牙尺、鯨尺などがそれである。また用途によってよばれるものも多い。文尺は足袋の文数を計るもの、呉服尺は服用、酒造尺は酒の仕入れ桶の中の酒の量を液面の位置を計って出すもの、溢引尺も酒造尺の一種である。地面、布、電線などに沿ってローラーを回し、その回転数から長さや料金を出すものも、物差し一種であるが、計量法ではこれらを回転尺とよんでいる。伊能忠敬が測量に用いた量程車や現在のタクシメーターもこれに属する。

小泉袈裟勝著『ものさし』（『ものと人間の文化史22』一九七〇・法政大学出版会）

モノサシトンボ 昆虫綱トンボ目モノサシトンボ科 *amulata* 昆虫綱トンボ目モノサシトンボ科に属する昆虫。体長四五センチ内外のやや大形のイトトンボで、樹陰のある溜水やその流出水に育ち、五〜八月にわたって出現する。羽化直後の

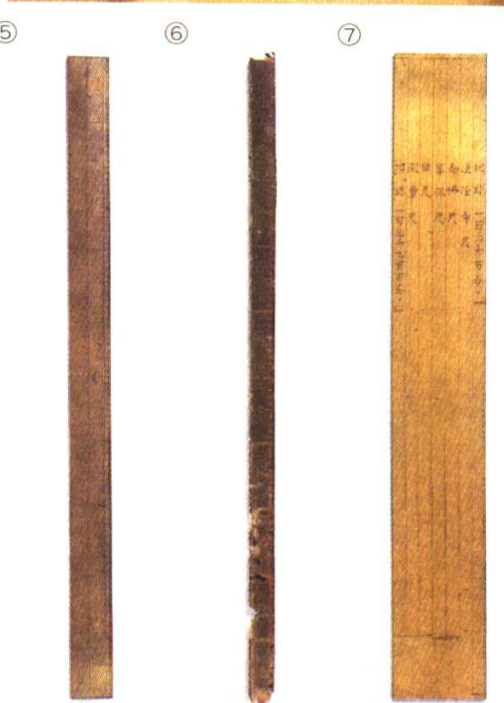
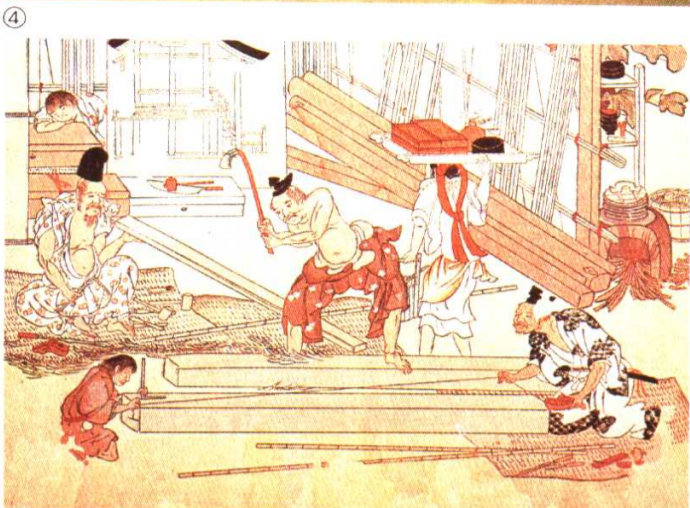
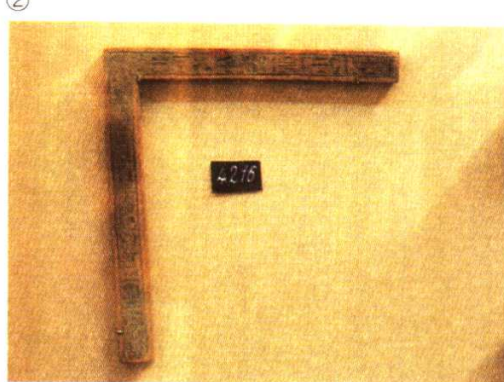
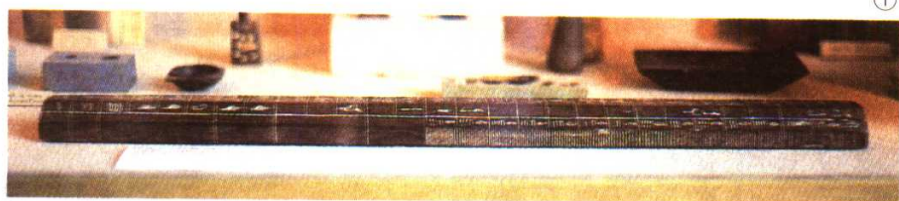
個体、とくに雌では体がやや黄褐色を帯びるが、成熟にしたがって黒色地に青緑色の斑紋を示す。日本列島では北海道から九州まで普通にみられるが、大陸では中国の中部に分布する。雄の四肢と後肢の脛節はすこし幅広くなるが、近似種のグンバイトンボのように著しく広がることはない。

朝比奈正二郎

物自体 ものじたい thing in itself カント

Ding an sich chose en soi カントの用語。カントによれば、われわれの周辺に広がる世界は、従来思われてきたように物のあるがままに現れているのではなくて、感性の先天的形式（空間・時間）を通して外から与えられた物が、悟性の先天的形式（範疇）によって総合的に構成されたものである。したがって、われわれのもつとも素朴な感覚と件でさえ、すでに空間・時間という主観の形式を経由したものであるから、われわれは感覚を刺激する外なるものをそのあるがままに認識すること

物差し



①古代エジプトの直尺。「王家の腕尺」とよばれるもので、書記の文房具として用いられた。パリ ルーブル美術館  
 ②古代エジプトの曲尺。建築などに必要な寸法や角度を割り出すのに用いられた。カイロ エジプト博物館  
 ③紅牙撥簾尺。象牙を紅染めしてはつり彫りを施した飛鳥時代の物差し。重文 法隆寺献納宝物 東京国立博物館  
 ④曲尺と間竿。鎌倉-桃山期の宮大工。木材の横には間竿とよばれる直尺が見られる。『職人尽絵』模本(部分) 川越市 喜多院  
 ⑤⑥⑦は近世の物差し。江戸時代には享保尺(⑤)、鯨尺(⑥)など寸法や名称の異なる多くの種類が併用された  
 ⑦明治の比例尺。各種尺間の比率を記した  
 ⑤⑥⑦は東京 国立科学博物館

ができない。それをカントは物自体とよぶ。のち『実践理性批判』においては、物自体の世界を自由の概念と結び付けて、現象界に対して叡智界と名づけた。物自体概念は、カント哲学の要石であると同時に、批判が集中した概念であり、その後のドイツ観念論の発展——フイヒテの自我概念に始まる絶対者概念の成熟——はそのままこの概念に対する批判的發展であったともいえる。  
 〈武村泰男〉

管。電子銃、ターゲット、アノードおよびグリッドなどを一つのガラス管に収めたもので、ターゲットにはテストパターンが印刷されておる。印刷用物質には、印刷されてない部分と比べて二次電子放出比が大きくとれるようなものが使われている。電子銃から発射された電子ビームがこのターゲットを走査すると、パターンに応じたターゲット電流が変動するので、これを映像信号として利用する。パターンには解像度試験用の楔形のほか、コントラストやグレースケールも印刷されてある。また、最近はコ

ンピュータなどの情報処理の分野で文字をブラウン管に表示することが多くなってきた。このような目的のために文字を発生するモノスコープもある。  
 〈木村 敏・金木利之〉

**モノディ monody** *monodie* *Monodie* *monodia* *monos* (単一) と *odie* (歌) との合成語で、広義には単一声部からなる音楽曲をさす。これは通常リコーンや鍵盤楽器による和弦的伴奏に伴われることが多いため、ホモフォニーの一種とみなされる。狭義には、一六〇〇年ごろ、ポリフォニー様式の反動としてイタリアで発展した独唱音楽の様式に対して用いられる。今日、単にモノディといえど、狭義の意味で用いるのが普通である。↓ホモフォニー ↓ポリフォニー

一六世紀の末、フィレンツェのカメラータ(バルディア家の学者や音楽家たちの集団)の間では古典ギリシア劇の再興が企てられていたが、モノディはその理念に端を発し、形成された。ここでは歌われる歌詞が高い表現力や劇性をもって一語一語克明に表現されることが求められ、旋律は通奏低音楽器の和弦的伴奏に支えられたレチタティーボ風なものとなっている。初期のモノディのもっとも有名なものには、カッチーニの『新音楽』(初版一六〇二)や、現存最古のオペラ『エウリディーチェ』(ペーリ、カッチーニ共作、一六〇〇初演)があげられる。その後、この様式はあらゆる音楽に急速に浸透し、器楽面では独奏ソナタの成立を促した。しかし、声楽や器楽固有の表現法の開発とともに、一六三〇年代を境に衰退した。  
 〈黒坂俊昭〉

**モノドラマ monodrama** たった一人の俳優が演ずる演劇、一人芝居。この意味では、古代ローマのパントミモスにその例がみられ、下つては一八世紀後半ドイツに俳優・劇作家ブランドスが出て流行する。音楽の伴奏で合唱隊が大筋を物語り、俳優が身ぶりによるパントマイムで視覚化していくのが一般であった。しかし、今日いうところのモノドラマはもうすこし内面性を重視し、一人の人物の心理的变化を克明に描き出すドラマをさす。こうしたモノドラマ論に影響を与えた人に、二〇世紀初頭のロシアの詩人エウレイノフがいる。彼は、登場人物の内的体験を観客が深く自らの体験とすることを演劇の本質とみなし、モノドラマこそ演劇の本来のあり方だと論じた。  
 〈高師昭南〉

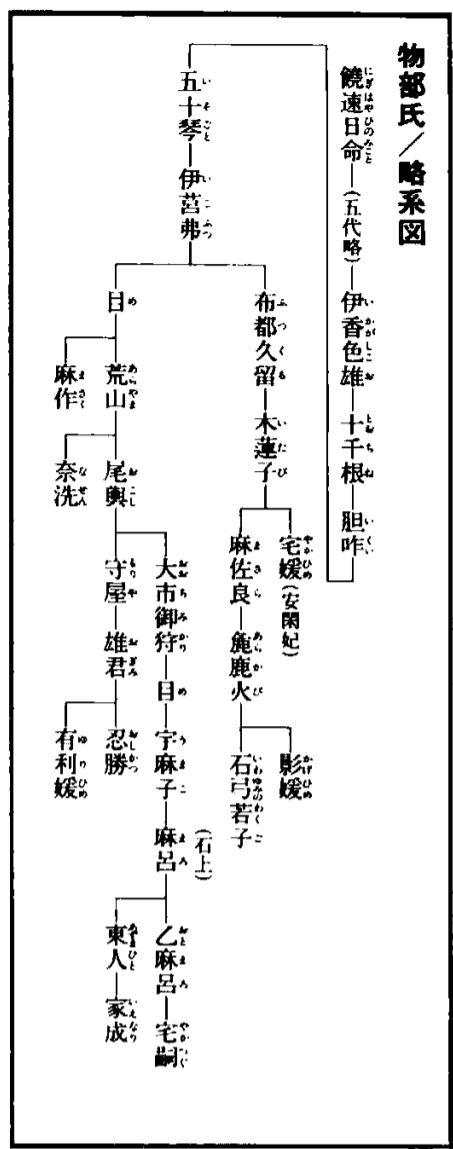
**物成** ものなり 近世、田畑の本租のこと。年貢、取箇、成箇、本途(物成)などもよばれた。↓年貢

**もののはれ** もののあわれ 平安朝の文芸理念を示すといわれる語で、本居宣長が重視した点でも知られる。宣長の『源氏物語玉の小櫛』(一九九刊)によれば、「あはれ」は「物に感ずること」で、「何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべき心を知りて感ずるを、もののはれを知る」といふのであり、とくに『源氏物語』は「もののはれ」を表現した最高の作品とされる。「あはれ」は古く記紀の歌謡などから感動を表す語として用いられているが、しだいに美意識も表すようになる。平安時代には調和のとれた美に感動することが多くなり、その場合しめやかな情緒を伴い、独特の優美な情趣の世界を形成するようになって、理念化されたとみられる。同じ時代の「をかし」と比べると、優美にかかわる点など類似した面をもつ一方、「をかし」の明るい性質に対して「あはれ」は哀感を伴う点など異なるところがある。「もののはれ」も、こういう当時の「あはれ」と内容はほぼ同様である。ただ「もののはれ」は「春雨のあはれ」「秋のあはれ」などを一般化したことばとみられ、「もののはれ」は「あはれ」の引き起こされる契機を示すのであろう。そして「あはれ」の性質は中世以後も変わっていき、強い感動を表す「あはれ」にもなり、同情や哀れみの意味での「あはれ」にもなるが、「もののはれ」にはそういう変動がなく、その点とくに平安朝的な「あはれ」を示す語ともいうことができる。↓をかし  
 〈武田元治〉

岡崎義恵著『日本文学史』(一九五五・岩波書店)  
 ▼『日本文学評論史』(久松潜一著作集5)  
 一九六八・至文堂)

**物の怪** もののけ 生霊、死霊などの類をいい、人に取り憑いて、病気にしたり、死に至らせたりする憑き物をいう。平安時代の文献にはよくこのことが記録されている。『紫式部日記』には、中宮のお産のとき、物の怪に対して屏風を立て巡らし調伏したことが記されている。『源氏物語』葵の巻に、「物の怪、生霊などいふもの多く出て来てさまさまの名のりする中に……」とあり、また同じ巻に「大殿には、御物の怪いたう起りていみじうわづらひたまふ」などがある。清少納言も『枕草子』のなかで、昔評判の修験者があちこち呼ばれ、物の怪を調

物部氏／略系図



伏する途中疲れて居眠りをしたので非難されたことなどを記している(「思はむ子を」)。ほかに「大鏡」「増鏡」などにも物の怪の記述がみえ、これらは閉鎖的な宮廷社会での平安貴族の精神生活の一面を反映したものとみられる。物の怪に取り憑かれることを「物の怪だつ」といひ、これにかかると、僧侶や修験者を招き、加持祈禱により調伏・退散させた。これには、物の怪を呪法によって追い出し、別の人(憑坐)にのりうつらせ、さらにそこから外界へ追い出し平癒させた。↓憑き物 <大藤時彦>

**物部氏** ものべのうじ 古代の有力氏族。連を姓とするが、六八四年(天武天皇・三)朝臣の姓を賜った。六世紀を中心とする氏族制の時代には、物部および物部を管掌する物部首、物部造など多数の同族関係の氏族を率いて、「物部の八十氏」と称され、大和朝廷の軍事・警察の役割をつかさどる強大な伴造氏族であった。一方、祖の伊香色雄が神への捧げ物を分配するなどの伝承もあり、祭祀にもかかわらず氏族であった。河内(大阪府)へ天下ったという饒速日命を始祖とする。大和の石上神宮(奈良県天理市)を氏神とするが、もと大和川下流の河内国淡川郡附近の地を本拠とし、のち大和へ進出したのであろう。その活動が史実としてほぼ確かになるのは、雄略朝の物部目あたりからで、継体朝の鹿鹿火が大連となったのは事実と思われる。鹿鹿火は筑紫国造磐井を滅ぼすに功があり、欽明朝に尾興、敏達・用明朝に守屋が大連となり、大臣の蘇我氏と並び、六世紀の朝廷に勢力があった。六世紀末、仏教受容の問題から蘇我氏との対立が激しくなり、五八七年(用明天皇二)に守屋は蘇我馬子と戦って滅びた。以後勢力が衰えるが、近江朝廷では物部麻呂が弘明天皇の側近に侍し、天武朝の朝臣賜

姓ののち氏を石上に改めて元明朝には左大臣となり、奈良時代後期には石上宅嗣が知られる。↓石上氏 <直木孝次郎>

**物部広泉** ものべこうせん (六五—八〇) 平安時代の医家。伊予国(愛媛県)の生まれ。年少より医学を学び、医書を博覧し、八二七年(天長四) 医博士兼兼業允となり、侍医に進み、従五位下内業正を兼ね、八五四年(斉衡一) 首の姓を改め朝臣を賜り、のち正五位下に昇進した。薬石の道には古今独歩の世評があり、老境に至っても若々しく不老長生の丹薬に通じていたとされ、わが国最初の養生法の専門書『撰養要訣』を撰した。 <宗田 一>

**物部神社** ものべじんじや 島根県大田市川合町に鎮座。宇摩志麻理命を祀る。宇摩志麻理命は饒速日命の子で物部氏の祖。神武天皇の詔を受けて、播磨を経て石見に至り、その地を平定のち守護にあたり、当地で薨じ、のち継体天皇のとき、子孫が社殿を造営したのが本社創建と伝承する。九四年(天慶四) 従四位上、「延喜式」で小社、のち石見国一宮とされ、中世には武將の保護を受け、近世江戸幕府より朱印領三百石を受けた。明治の制で国幣小社。例祭一〇月九日。ほかに一月一五日の小豆御饗神事など特殊神事が多い。 <鎌田純一>

**物部鹿鹿火** ものべのあらかい (?—五三) 武烈、継体、安閑、宣化四朝の大連。名は「あらかい」とも読み、鹿鹿火、荒甲とも書く。武烈天皇没後、大伴金村らと継体の擁立を図り、功によりものとごとく大連に任じられた。継体天皇六年(五三)、大連大伴金村は百濟の要請をいれて任那四島の割譲を決し、鹿鹿火を宣勅使としたが、鹿鹿火は妻の諫言により病と称して使を辞退した(後年四島割譲のことで金村は失脚した)。同二年(五七) 筑紫国造磐

井が新羅と通じて、征新羅將軍近江毛野の渡海を遮ると、天皇は金村の推挙によって鹿鹿火を起用し、筑紫以西をすべて彼にゆだねた。彼は翌年、筑紫の御井郡(福岡県久留米市)に戦って磐井を斬り、乱を鎮めたという。しかし、その子孫で世に知られる者はいない。↓磐井の乱 <篠 弘道>

**物部尾興** ものべのおこし 生没年不詳。欽明朝の大連。守屋の父。欽明天皇の即位とともに大連に任じられたが、その元年(五〇)には天皇の諮問に答えて新羅を軽々に討つべきでないこと、大連大伴金村がたやすく任那四島を百濟に譲ったため新羅の怒みは年久しいこと、などを奏聞し、金村を隠退に追い込んだ。欽明天皇一三年(五三)の仏教公伝に際し、天皇は礼仏の可否を群臣に問うたが、彼は大臣蘇我稲目に反対し、中臣鎌子(藤原鎌足)とともに断固排斥すべきことを主張した。これを機に蘇我・物部両氏の権力争いはいつそう熾烈となり、次代の馬子・守屋時代まで持ち越された。子の守屋が敏達朝に大連となっていたから、尾興は欽明朝に没したのであろう。 <篠 弘道>

**物部守屋** ものべのもりや (?—六七) 敏達・用明朝の大連。尾興の子。母姓により弓削守屋ともいった。敏達天皇元年(五三) 欽明朝に引き続いて大連となり、大臣蘇我馬子と対立した。同一年仏法の廃棄を奏請して許され、馬子の建てた寺と仏像を焼き、焼け残りの仏像を難波の堀江に投棄した。同年、天皇の崩後、殯宮に誅したとき、馬子と互いに相手の姿を嘲笑し、これより二人の間に怨恨を生じたというが、本末を顛倒した話であろう。用明即位後も大連となったが、やがて天皇の異母弟穴穗部皇子と結び、その擁立を図った。その二年(五七) 用明が没すると穴穗部の即位を図ったが、まもなく皇子は馬子に殺されてしまった。ここにおいて守屋は馬子と雌雄を決することとなったが、皇族・豪族の大半を味方にした馬子に河内淡河(大阪府八尾市)の本拠を攻められ、ついに射殺された。乱後、彼の奴のなかばと宅地とを分けて四天王寺に施入した。馬子の妻は守屋の妹で、時人は、馬子が妾りに妻の計により守屋を殺したと評した。 <篠 弘道>

**モノフォニー monophony** Mono-phonie 音楽においてテクスチャ(音構成原理)を形成する方式の一つで単旋律を主眼とする。現象としては多声であっても、ユニゾンやオクターブ平行を同音とみなす音楽慣習によっていけば、意識としてのモノフォニーとみなされる。この種の重音モノフォニーは、音の垂直面を重視した音構成原理ホモフォニーの一種とみなされることもある。単旋律を表面に打ち出すのが特徴で、歌詞が聞き取りやすく、諸民族の民謡、ヨーロッパ中世の宗教歌曲や世俗歌曲で典型的にみられる。 <山口 修>

**物部(村)** ものべ(むら) 高知県東部、香美郡の村。徳島県と接する。一九五六年(昭和三十) 横山、上生川の二村が合併して成立。国道一九五号が通じる。村域は物部川の上流にあたる横山川・上生川流域に展開し、平地に恵まれない、かつては傾斜地での焼畑農業や、役牛飼育が盛んであった。林野率約九〇%でスギ、ヒノキの用材のほか、コウゾ、ミツマタの産地でもある。中心地大柵は横山川と上生川の合流地であり、付近には永瀬ダムがある。北部の三嶺(八三三)は、白髪山などの山々と別府、西熊などの溪谷は剣山国定公園と奥物部県立自然公園域。「土佐の神楽」は国指定重要無形民俗文化財。人口四二八二。 <大脇保彦>

④ 統物部村史(一九七五・物部村) 「手結」

**物部川** ものべがわ 高知県中東部を南西流して土佐湾に注ぐ川。延長七〇。上流は横山川とよばれ、四国山地東部の剣山系白髪山東斜面に源を発し、西流して物部村大柵で上生川と合流して物部川となり、河岸段丘を発達させながら南流し、下流に扇状地性低地・台地の香長平野(高知平野東半部)をつくり、吉川村で土佐湾に入る。支流上生川には西熊溪谷などがあり上流域一帯は奥物部県立自然公園域。第二次世界大戦後、中・上流は電源開発が進み、永瀬ダムなどがつくられた。下流の沖積低地には弥生期の水田跡、条里遺構もみられる。土佐農業の中核地で、かつては稲の二期作、現在は施設園芸が盛ん。 <大脇保彦>

**物干し** ものほし 洗濯物や寝具を干す場所、干すための用具をいう。物干し場は、日当りや通風のよい場所、主婦が働きやすいように、サービスマンやユーティリティの近くが望ましいが、住宅事情によっては屋根の上やバルコニー、軒下なども利用される。物干しには固定式と移動式がある。固定式は竿をかける柱を一定の場所に埋め込んだり固定

してあるもので、移動式は日当りのぐあいにより柱が移動できるものである。材料は丸太や竹竿のほかにビニル製の竿、紐にビニルをかぶせた干し綱、小物を干すのに適したハンガー式などがある。

干し方は、以前は長い丸太を立てて何段にも竿を渡す縦並列型が多かったが、最近ではT字型の柱を立てた横並列型が増えて、作業が容易になった。近年、道路やほかの建物から見えないよう、物干し場や竿の位置まで考慮したマンションが建てられるようになった。〔中村 仁〕

**モノマー** 単量体。自分以外の人間、動物、器物の音声や形態を、自分の声や身ぶりになぞること。また狭義には、そういう物真似を演じて見せる芸をいう。

他者をなぞるこの物真似という模倣本能は、環境への適応に死活がかかる生物一般のものであるが（昆虫の擬態など）、とくに自己と他者の関係を鋭く意識することでできあがっている人間社会のなかで、物真似は文化を解くキーワードとなってきた感さえあるといえる。人間文化は周囲の自然との乖離を進歩の指針とし、ひとりひとりの人間は周囲の人間との違いを個性化とよぶことで進んできたが、そうした進歩の見返りとして、自然、動物、他の人間といった他者と鋭く対立する人間個人の孤独、生き生きとした宇宙とのつながりから断たれた孤立という現象がおきてきた。文明化、都市化に伴うこの孤独から身を守ろうとする個体は、さまざまなまねる営みをくふうすることで、世界との失われた一体感を回復しようとしているのだと考えられる。

物真似の起源は模倣呪術とか類似呪術とかよばれる呪術的な物真似にあった。たとえばフランスの社会学者L・レヴィ・ブリューが未開民族の習俗にみいだした「融即」 participation という状態がその極致で、部族のトーテムたる鳥獣の物真似をしている踊り手は、その瞬間、その鳥獣をまねているのではなくて、人でありながらすなわち鳥獣であるという形で、矛盾律によってたつ近代人の論理をあっさり超越してしまっている。こうしたトーテムシズムの舞踏、精霊や死者の物真似、呪術的・宗教的な仮装や仮面、わが国の民俗芸能にみる農耕の物真似、獅子舞や鹿踊りなど、共同体と聖なるものとのつながりを確認させるための民俗の知恵で

ある。模倣芸を行うギリシアの芸人「ミメ」も元来はそうした呪術的な物真似をする人間をいい、のちには模倣一般をさすことになる「ミメシス」も元来はミメたちの呪術的行為をいった。日本で最初に物真似が言及される『日本書紀』の海幸・山幸説話でも、そこで物真似を行う「俳優」は神々をも楽しませる宇宙的次元をもった存在であったはずである。

トーテム模倣は未開の風俗だが、われわれの周囲にも、孤独な個体が「あたかも……のごとく」という見立ての約束を通じて一時的に他者になるくふうがある。広くプレイ（遊び、演技）とよばれる営みがそれで、物真似の営みが遊び論、演劇起源論のなかで論じられることが多いのはそのためである。子供のするままごとや軍隊ごっこといった「……ごっこ」の遊びは、母親や兵隊の物真似をする「あたかも……のごとく」という見立てや「振り」の構造において、そっくり演劇の起源にも通じている。他者に扮してそれらしくまねしようとするのが俳優術の基本であろう。アリストテレスの『詩学』の悲劇論のなかで、「ミメシス（模倣）」

「悲劇論のなかで、『ミメシス（模倣）」が取り上げられており、世阿弥の『風姿花伝』にも、「物学条々」としてさまざまな役柄の演技のあり方が論じられている。また、自己と他者の関係の微妙な揺れのうえに成立する演劇のあり方を、双子の主題や変装や仮面という小道具を使って主題化したのがパロディ演劇であるともいえる。日本では芸能としての物真似は南北朝時代に現れ、能楽、歌舞伎（とくに猿若の独り狂言）のなかで大成されている。物真似自体が鑑賞の対象になる演劇形式にはミムス、マイム、パントマイム、默劇、身振り狂言があり、さらに役者の所作や声をまねる「物真似」「声色」、動物や虫の音声をまねる「猫八芸」などの演芸に至る。

さらに演劇自体が社会全体をより正確にまねしようとして写実主義演劇を生んでいくが、「芸」というものは虚と実の皮膜の間にあるものなり（近松門左衛門）といわれるように、行きすぎた模倣はかえって不自然となる。元のものをもまねながら誇張やずれをつくって笑いを引き出すパロディや戯画といった風刺文化の流行、真似のテクノロジーたる複製技術の独走、服飾や風俗などのファッションやテレビでの「物真似ショー」の瀾漫、スーパーリアリズムという「行きすぎた模倣」の隆昌など、現代

は物真似過剰、擬似現実過剰の時代ともいえよう。しかし、まねることによって世界との失われた一体感を回復しようとする原点から逸脱したこれらの現象を前に、今われわれには自己と他者、独創性と複製技術の関係をめぐる真の反省が改めて必要とされている。↓遊び ↓演劇 ↓仮装 ↓仮面 ↓トーテムシズム ↓パントマイム ↓ミメシス ↓模倣

〔高山 宏〕  
ロジェ・カイヨワ著、清水幾太郎・霧生和夫訳『遊びと人間』（一九七〇・岩波書店）  
▽ジョン・ボードリヤール著、今村仁司・塚原史訳『象徴交換と死』（一九七三・筑摩書房）  
▽ジュディス・ウェクスラー著、高山宏訳『人間喜劇——一九世紀パリの観相術とカリカチュア』（一九七〇・ありな書房）

**物見** ものみ 物事を見る意から、祭礼や展覧会などの催し物を見物することをいう。転じて、物を見ることの意味から、城や屋敷に設けられた物見櫓のような遠方を望み見る高樓や、牛車、駕籠、輿などにつけられた小窓のほか、幕、編笠などの外をのぞき見るための穴をいう。また戦場などで、敵の動静などを探ることや、その任にあたる斥候を意味する。物見車は祭礼の見物や遊山の際に用いられた牛車、物見姿といえ物見遊山のとときのよそ行きの服装で、物見高いという語はなんでも珍しがって見物する好奇心の強いことをいう。〔宇田敏彦〕

**ものみの塔** ものみのとう 江戸の証人。物詣で・遊山 ものもうで・ゆきん 物詣でとは、神仏へ祈願するために神社仏閣等へ参拝すること。平安時代には貴族たちを中心として京都・奈良の諸寺社へ参詣することが多かったが、末期から鎌倉時代にかけては熊野・伊勢・高野詣でなどの遠距離のものが盛んになった。鳥羽上皇は一六度、後白河上皇は三四度も熊野詣でを行った。熊野詣では多くの人々が列をなして続くことから「蟻の熊野詣で」といわれるほど、盛況であった。近世に入って交通の発達とともに寺社への参詣はたいへん盛んになった。旅行に必要な名所旧跡案内書が多く出版され、前代ではみられない庶民の遠出がみられた。庶民は伊勢講、金比羅講等の講を組織し参詣するようになった。講には、講中の全員の参加と、祈願を代理する者をたてる代参との二種類がみられた。現在、観光旅行は年々盛況となっているが、寺社詣での伝統は根強く残り、見学地に神社仏

閣の含まれていることが多い。〔芳井敬郎〕

**ものもらい** 麦粒腫  
**モノレール** monorail 一本のレールで走る鉄道。車両がレールにまたがって走る跨座式と、車両がレールにつり下がる懸垂式がある。元来鉄道はその字のように発生の過程からレールも車輪も鉄製だったが、モノレールのレールは初期には木製、続いて鉄となり、現在は鉄筋コンクリートが主流である。車輪も鉄よりゴムタイヤ式が増えている

〔沿革〕一八二四年、世界最初のモノレールがイギリスのヘンリー・ポーマーによってロンドンに生まれた。最初の鉄道、G・ステイブンスンのロコモーション号の一年前である。すでに煉鉄製のレールはつくられていたが、ポーマーは木のレールを使い、レールにつるされた籠を馬が引く方式で、重い荷物を積んだ馬車が悪路で荷物を落として壊すのを防ぐために考案されたという。もちろん、輸送力はロコモーション号とは比べものにならない。

一八八八年になって、本格的なモノレールがラルティグによってアイルランドのリストウェル・バリバニオン間一五メートルに敷設された。一本の鉄レールを地上一メートルの高さに支柱で支え、蒸気機関車をまたがらせて貨車や客車を引いた。跨座式で、バランスをとるために蒸気機関車のボイラーはレールの左右に一本ずつ配置され、鉄製の車輪は横からはまったく見えなかった。三六年間営業を続けて廃業している。

一九〇一年、ドイツのオイゲン・ランゲンによって、ウッパータール市の市内交通用に一三・三メートルのモノレールが開業した。ウッパータールは狭い谷あいの町なので、川の上を鉄骨を組んで懸垂式モノレールを走らせたのである。鉄のレールに鉄の車輪の空中電車は最高時速六〇メートル、多少の騒音はあるが信号待ちや交通事故もなく、運行も頻繁で現在も営業を続けている。

日本にモノレールが紹介されたのは、一九二八年（昭和三）大阪天王寺公園の電気博覧会の懸垂式モノレールである。この空中電車は安全性への信頼感が得られず、博覧会の見せ物に終わった。

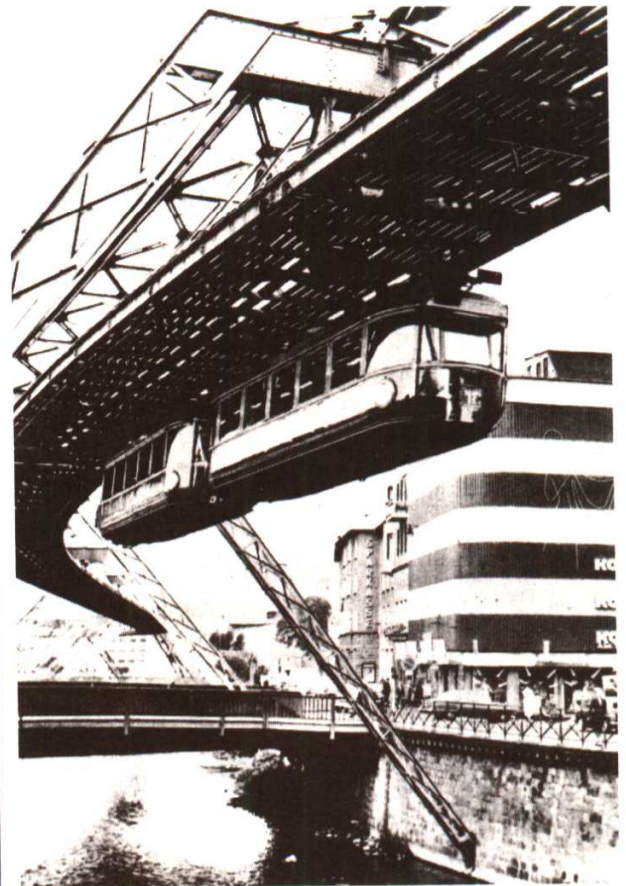
第二次世界大戦後の一九五二年、スウェーデン生まれの実業家アクセル・レナルド・ウェンナー・グレンが新しいモノレールの実験を西下



東京上野動物園のモノレール。入場者の園内遊覧に利用されている。日本車両式



名鉄犬山モノレール線。成田山大聖寺の参詣客や日本モンキーパークの来場者に利用されている。アルweg式



1901年に開通した西ドイツのウッパータール市のモノレール。全鉄橋式複線で、全長13.3kmのうち約10kmはウッパー川上空に、残りの約3kmは街路上に設けられている。現在も稼動中。ランゲン式



湘南モノレール。地域に根づいた路線として通勤客に欠かせない存在となっている。写真は駅に停車中のもので、乗客の落下防止のためのネットが張られている。サフェージュ式



東京モノレール。都心と空港を15分で結ぶ東京湾沿いの路線。1日に輸送する人員は16万人を超える。アルweg式

一九六〇年にはフランスのパリでサフェージュ式モノレールが生まれた。ランゲン式、日本車両式と同様の懸垂式モノレールだが、レールが鋼板箱型の筒状で、その中を車両の屋根上の支柱につけられたゴムタイヤ車輪が走行する。一九六二年三月二日、名古屋鉄道犬山遊園駅から動物園までの一・二キロメートルに、アルweg式モノレールが架設された。途中にある九七%（パーミル、千分率）の急勾配を克服するために、ゴムタイヤのアルweg式が適当なためである。アルweg式は六四年一月一日から、神奈川県川崎市の読売ランド内を一周する三キロメートルも開設された。同じ年の二月七日、サフェージュ式が名古屋市東山公園の動物園と植物園を結ぶ四五〇メートルに、一両の車両で開通した。

一九六四年九月一七日、東京モノレールが浜松町―羽田空港間一三・一キロメートルを一五分で結ぶ本格的都市交通機関として営業運転を開始した。西ドイツで生まれて日本で実用化されたアルweg式モノレールが、東京オリンピック出場のため全世界から集まった選手たちを東京に輸送したのである。

一九六六年四月二三日、小田急電鉄向ヶ丘遊園駅と遊園正門間一・一キロメートルにロックード式モノレールが完成。跨座式であるがアルweg式と違って鉄のレールと車輪である。同じ年の五月二日、神奈川県の大船駅とドリムランド遊園間五・三キロメートルにアルweg式

ドイツのケルン近郊で開始した。原理はラルティグと同じ跨座式だが、レールは太い鉄筋コンクリート、車輪は大型のゴムタイヤとし、走行用車輪のほかにレールを挟む補助車輪を取り付けて安定を保つ方式を採用、考案者の頭文字を集めてアルweg（ALWEG）式と命名した。アルweg式はモノレールの実用化を大きく進め、五七年にはケルンの博覧会場に一・八キロメートルが、五九年にはアメリカのデイスニーランドの中に一周四キロメートルが開設された。

日本では一九五七年（昭和三二）一月二七日、路面電車にかわる新しい都市交通機関の研究と園内遊覧用を兼ねて、東京都交通局が上野動物園に三三〇メートルの懸垂式モノレールを建設した。日本車両会社が製造し、西ドイツのウッパータールのランゲン式と似ているが、ゴムタイヤ車輪を使用する点が異なり、日本車両式といわれている。

一九六〇年にはフランスのパリでサフェージュ式モノレールが生まれた。ランゲン式、日本車両式と同様の懸垂式モノレールだが、レールが鋼板箱型の筒状で、その中を車両の屋根上の支柱につけられたゴムタイヤ車輪が走行する。一九六二年三月二日、名古屋鉄道犬山遊園駅から動物園までの一・二キロメートルに、アルweg式モノレールが架設された。途中にある九七%（パーミル、千分率）の急勾配を克服するために、ゴムタイヤのアルweg式が適当なためである。アルweg式は六四年一月一日から、神奈川県川崎市の読売ランド内を一周する三キロメートルも開設された。同じ年の二月七日、サフェージュ式が名古屋市東山公園の動物園と植物園を結ぶ四五〇メートルに、一両の車両で開通した。

モノレールが開業。また、同年五月一七日には兵庫県姫路駅と手柄山中央公園間一・八キロメートルにロックード式モノレールが開通した。一九七〇年三月七日、大船から西鎌倉までの湘南モノレールが営業を始め、翌年終点江の島まで六・六キロメートルの全線が完成した。この七〇年には三月一五日から大阪千里丘陵で万国博覧会が開催され、会場内の観客輸送用にアルweg式モノレールが敷設されている。〔分類と構造〕懸垂式にはランゲン式、日本車両式、サフェージュ式、跨座式にはアルweg式、ロックード式がある。動力はいずれも電気

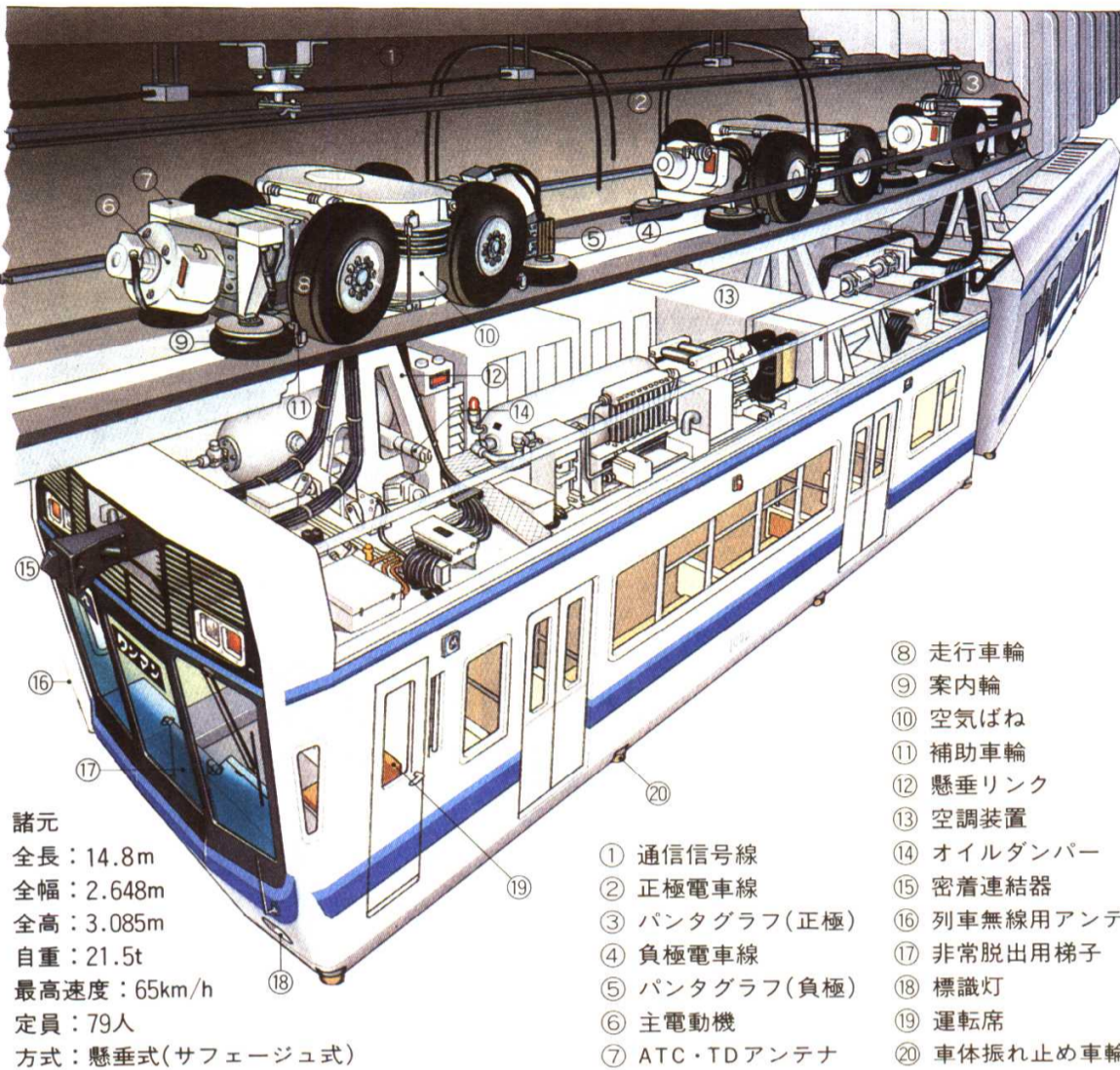
モノレール／日本のおもなモノレール

路線名	運営	区間	駅数	延長 (km)	車両編成	方式	完成年
犬山モノレール線	名古屋鉄道	犬山遊園～動物園	3	1.2	2,4	☐	1962
東京モノレール羽田線	東京モノレール	浜松町～羽田空港	6	13.1	6	☐	1964
向ヶ丘モノレール線	小田急電鉄	向ヶ丘遊園～向ヶ丘遊園正門	2	1.1	2	☐	1966
湘南モノレール江の島線	湘南モノレール	大船～湘南江の島	8	6.6	2,3	☐	1971
北九州モノレール小倉線	北九州高速鉄道	小倉～企救丘	12	8.4	4	☐	1985
千葉都市モノレール1号線*	千葉都市モノレール	中央港～県庁前	6	3.4	2	☐	1992
		千葉駅～千城台団地	13	12.1	2	☐	1990

注：\*は全通予定。路線名は通称。1988年5月現在

☐ 跨座式 ☐ 懸垂式

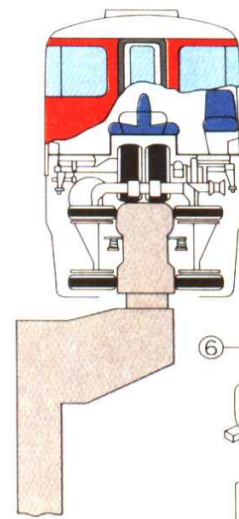
モノレール／懸垂式モノレールの構造(千葉都市モノレール)



諸元  
 全長：14.8m  
 全幅：2.648m  
 全高：3.085m  
 自重：21.5t  
 最高速度：65km/h  
 定員：79人  
 方式：懸垂式(サフェージュ式)

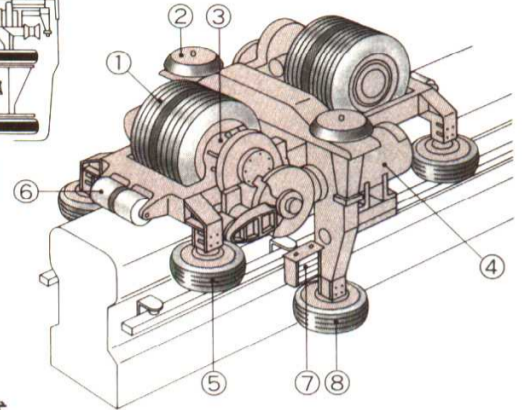
- ① 通信信号線
- ② 正極電車線
- ③ パンタグラフ(正極)
- ④ 負極電車線
- ⑤ パンタグラフ(負極)
- ⑥ 主電動機
- ⑦ ATC・TDアンテナ
- ⑧ 走行車輪
- ⑨ 案内輪
- ⑩ 空気ばね
- ⑪ 補助車輪
- ⑫ 懸垂リンク
- ⑬ 空調装置
- ⑭ オイルダンパー
- ⑮ 密着連結器
- ⑯ 列車無線用アンテナ
- ⑰ 非常脱出用梯子
- ⑱ 標識灯
- ⑲ 運転席
- ⑳ 車体振れ止め車輪

アルウェグ式

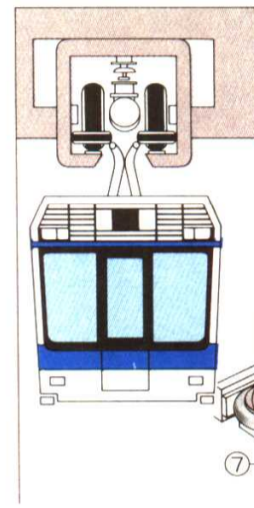


台車機構

- ① 走行車輪
- ② 空気ばね
- ③ 駆動装置
- ④ 主電動機
- ⑤ 案内輪
- ⑥ 補助車輪
- ⑦ 集電装置
- ⑧ 安定車輪

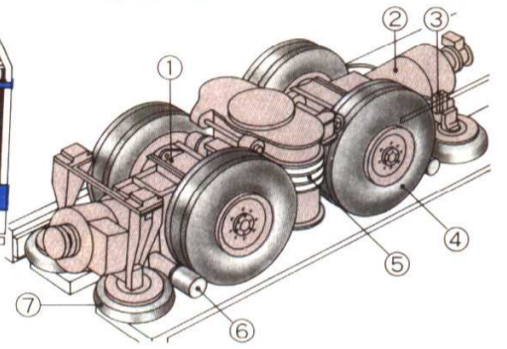


サフェージュ式



台車機構

- ① 駆動装置
- ② 主電動機
- ③ パンタグラフ(負極)
- ④ 走行車輪
- ⑤ 空気ばね
- ⑥ 補助車輪
- ⑦ 案内輪



である。

〔懸垂式モノレール〕(1)ランゲン式 西ドイツ、ルール工業地帯のウッパタール市に走っている。鉄骨で空中に支えられた鉄のレールに鉄の車輪がのり、車輪の車軸は逆L字型に曲がって車両を懸垂している。車体は長さ二二・二m、幅二・二mで二両連結。

(2)日本車両式 東京上野動物園。レールは鋼板製箱型でゴムタイヤ車輪がレールに乗り、タイヤが外れないように補助車輪が左右からレールを挟んでいる。車両は片側補助車輪の車軸に懸垂される。車体は長さ九・五m、幅一・七mで二両連結。

(3)サフェージュ式 名古屋市東山公園、大船江の島間の湘南モノレールに使用。レールは鋼板製の箱型で、車両を懸垂するために筒状の箱の下面中央部は開いている。箱の開口部両側を走る二つの走行用ゴムタイヤが、箱型レールに抱え込まれている形である。左右動を防ぐ補助車輪はレールの内側から側面を押している。車体の大きさは、東山公園が長さ一七m、幅三mで一両、湘南モノレールは長さ一三m、幅二・六mで二両か三両連結。

〔跨座式モノレール〕(1)アルウェグ式 アメリカのデイズニランド、名鉄犬山モノレール線、東京モノレールで採用。レールは太いI字型の鉄筋コンクリートで、走行用ゴムタイヤがレールの上のり、補助車輪が左右からレールを挟んで安定を保つ。車体の大きさは、犬山モノレールが長さ二二m、幅二・九mの三両連結。東京モノレールは長さ一〇mの六両連結と一五mの四両連結で、幅は三mである。

(2)ロッキード式 小田急向ヶ丘モノレール線。コンクリート製の桁の上に鉄のレールを乗せ、その上を鉄の車輪が走る。鉄の補助車輪がコンクリート桁を左右から挟んでいるが、鉄車輪のあたる部分には鉄レールが取り付けられている。車体の長さは一三・三m、幅三mで二両連結。

〔将来の展望〕上野動物園のモノレールは営業を継続しているが、読売ランドと姫路市は解体され、ドリームランド線はコンクリートがひび割れて廃業した。しかし、東京モノレールは表定時速五二・二メートルの高速性と頻繁な運転、適当な運賃で盛業中である。湘南モノレールは路線が短く、単線のため運転頻度に制限があり経営的に楽とはいえない。

しかし、あまり場所をとらずに空間が有効に

利用でき、建設費が地下鉄の三分の一以下です。モノレールは、立地条件さえよければ中量・高速交通機関として見直す傾向も出てきている。一九七〇年以降建設されなかったモノレールも、八五年、北九州高速鉄道が北九州市の小倉一企救丘間八・四メートルを跨座式により開業した。また千葉市では、交通混雑緩和と通勤客輸送のために、千葉都市モノレールが懸垂式により、一号線(中央港―県庁前間、一九九二年開通目標)と二号線(千葉駅―千城台団地間、一九九〇年開通目標、一部が八八年三月に開通)の総延長一五・五メートルを建設中で、その成果が期待されている。(吉村光夫)

**モノローグ monologue** 演劇用語。「独白」と訳される。自らの行動の動機、決意、心理を表現する独台詞であるが、舞台上のたった一人の人物が一人でしゃべる台詞という点で、他の登場人物がいる所でしゃべる独台詞「傍白」(約束事そのことばは観客だけに聞こえ、他の登場人物には聞こえない)と区別される。古典劇では一般的で、『ハムレット』中の「生きるべきか、死ぬべきか」はとくに有名。近代劇以後では従来の性質よりも、劇のそれまでの場面を要約、批評しながら次の場面へと観客をいざなう進行の性質が強い。しかし一方、心理的モノローグが拡大して独立した演劇形式、モノドラマ(一人芝居)を生む。ダイアログ dialogue (対話)の対の用語。(高師昭南)

**藻場** もば 海洋の沿岸の浅所に生育する沈水性の海藻(海産顕花植物)や大形海藻の群落を藻場とよぶ。藻場には大別して、波の静かな沿岸や内湾の砂泥地に生育するヒルムシロ科のアマモの群落のアマモ場(またはアジモ場)と、外海沿岸の岩礁地帯に生育するホンダワラ類で形成されるガラモ場がある。そのほか、アラメ・カジメ類、コンブ類などの大形褐藻類の群落があるが、それらはその形状から海中林とよばれている。これらの藻場は、景観的に目だつばかりでなく、活発に光合成を行う沿岸における有力な一次生産者であることや、微小動物から魚類に至る複雑豊富な生物相を有し、沿岸生態系のなかで重要な位置を占めている。藻場には多くの魚類が集まるが、その理由は十分に解明されていない。藻場の存在している海域では、水中の溶存酸素量、有機物が増加し、珪藻類、小形藻類、小形エビ類、端脚類、等脚類などの小形甲殻類、小形巻貝類、コケムシ類、ヒ

ドロ虫類など、おびただしい種類と量が藻の表面に付着し、魚類にとっては食物が豊富で、摂食場所としての意義がある。また藻場の存在が稚魚を外敵から守る役割をも果たしている。ギンポやハゼ類の仲間のように藻場で終生を過ごす魚類もあるが、クロダイ、スズキ、メバル、アイナメなどのように、その生活史の初期段階を藻場で過ごす重要魚種も多く、これらの場所を保護する必要があるが、藻場の存在する沿岸浅所は工場立地としても適していることが多い。近年、多くの場所が埋立てなどで藻場が消失している。このため人工的に藻場をつくる試みもなされている。

〈吉原喜好〉

**モハーチの戦い** —のたたかい 一五二六年、現ハンガリー南部のモハーチ Mohács で行われたオスマン・トルコ帝国軍とハンガリー軍との会戦。トルコ軍が勝利を得、続いてブダまで北上。以後二世紀の間トルコの対ヨーロッパ戦線はハンガリーに膠着。国王ルドウィク(ラヨシユ)二世討ち死に後のハンガリーでは、王位をめぐって大貴族と中小貴族の対立が表面化し、サポヤイの東ハンガリー王国(後のトラシルバニア公国)と大貴族に推されたフェルディナンド一世の西ハンガリー王国が成立し、トルコ占領下の中部とあわせて三分割時代を迎えた。他方ハプスブルク家はハンガリーへの勢力拡大を果たし、また、チェコの新教派貴族を打ち破った一六二〇年の白山の戦いによるボヘミア支配とあわせて、以後五世紀にわたる中欧帝国の基礎を築いた。

〈家田 修〉

④矢田俊隆編『東欧史』新版(一九七七・山川出版社)▽嶋田襄平編『イスラム帝国の遺産』(一九七〇・平凡社)

**モーパッサン** Guy de Maupassant

(一八五〇—一九一三) フランスの作家。長編小説、戯曲、詩集、時事評論文も残したが、主として短編小説家として知られている。八月五日、フランス北西部ノルマンディー地方の海岸部で生まれたが、詳しい出生地については諸説がある。父ギユスタブは株の仲買人、母ロールは文学的教養もあり、フロベールの親友アルフレッド・ル・ポアトバン Alfred Le Poitevin の妹だった。のちにそれが機縁となって、フロベールとモーパッサンの師弟・友情関係が生まれる。家庭をほとんど顧みない父と、子供たち(モーパッサンには五歳違いの弟エルベがいた)を偏愛するやや神経質な母のもとで、モーパッサ



モーパッサン

ンは漁民、農民の子供たちと自由に山野を駆け巡ったり、遠泳に出たりして幼少年時代を送ったといわれる。

一八七〇年、プロイセン・フランス戦争が始まると、当時パリ大学法学部に在籍だったモーパッサンも出征、プロシア軍が侵入してきたノルマンディー地方で、戦争を体験した。七一年除隊、翌年パリに出て、海軍省に就職。昼間は役所勤め、夜と休日は、ひとりで、あるいは友人たちと、大好きなボート遊びに興じた。やがて詩作、小説の創作を試み、母を通じてフロベールの指導を仰ぐことになる。七八年、同じくフロベールの世話で文部省に移り、勤務はやや楽になったが、その後の八〇年までのほぼ一〇年間、彼は大部分の時間を役所勤めにとられながら、ボート遊びと文学修業に文字どおり骨身を削る。一方、七五年ごろから、フロベールを通して、当時の著名作家ゴンクールやゾラ、またその周辺に集まっていた作家志望の青年たちともしだいに交際するようになっていった。八〇年に発表された『メダンの夕べ』は、ゾラの名前を踏み台に、挑戦的な作品で世間の注目を集めようとする文学青年たち(ユイスマンズ、アンリ・セアール Henri Gaud (一八五〇—一九一三)、ポール・アレクシスら)の試みだったが、この作品集にモーパッサンが寄せた『脂肪の塊』は、ゾラも含めた他の執筆者の作品に勝るものとして、モーパッサンの文壇への登場のきっかけとなった。これまで彼を温かく、ときに厳しく導いてきたフロベールも、弟子の作品を「後世に残る傑作」と激賞し、同年五月に世を去っている。↓メダン派

それ以後、モーパッサンは、文芸部門にも力を入れていた保守的傾向の日刊紙『ゴローア』『シル・ブラス』と契約を結び、役所勤めもやめ、ほぼ週にそれぞれ一作ずつの割合で短編小説、時事評論文を寄稿、また『女の一生』(一八八三)、『ペラミ』(一八八五)などの長編小説を連載

している。

モーパッサンは、幼少年時代の野外での生活、その後のボート遊びなどから、身体的にきわめて頑健だった印象を与える。しかし一方で彼は、若いころから絶えず恐ろしい病気と闘わねばならなかった。役人時代にフロベールや母に宛てた手紙にも、すでに目の失調や脱毛を訴えるものがみられ、やがてそれは化学療法、各地の温泉での治療にもかかわらず、全身を冒し、精神異常へと導いていく。今日ではほぼ確実に、先天性かつ後天性梅毒によるものと考えられている。一八九二年元日、かみそり自殺を計ったあと、パリにあるブランシュ博士 Dr. toine Emilie Blanche (一八三九—一九一三)の精神病院に入り、翌九三年七月六日、そこで世を去ることになる。四二歳の若きであった。

『作品の特質』モーパッサンのおもな作品には、『女の一生』、『ペラミ』のほか、『モントリオール』(一八八五)、『ピエールとジャン』(一八八六)、『死の如く強し』(一八八七)、『我らの心』(一八八〇)などの長編、短編約三〇〇、時事評論文約一五〇、旅行記三冊、詩集一冊、戯曲三編があり、ゾラ、ゴンクールなどで代表される自然主義文学のなかに系列づけられるが、彼の場合、大きな構想をもった小説世界を設定し、そこに想像上の人物を登場させていくというより、自身が日常体験し、観察したものを、ほとんど直接に読者の前に提出している印象を与える。日刊紙に彼が寄稿した短編小説には、時事評論文とほとんど見分けがつかないものが少なくないのは、そのためである。

またその題材も直接目に触れた世界に限られ、ノルマンディー地方の農漁民、パリの役人、のちには社交界の男女、戦争の犠牲者、そして病気の進行に伴う不安・恐怖、それからの脱出の試みなどが、一貫して扱われている。むしろ、こうした観察結果の直接提示という印象は、精巧な技法に支えられており、モーパッサンを短編技法のあるタイプの完成者と考える人もいる。いずれにせよ、モーパッサンは、一九世紀後半のフランス社会の一面面について、その重苦しい雰囲気をよく伝える作品を多く残したといえよう。

日本でもモーパッサンの作品は、一九〇一年(明治三四)ごろから英訳を通して翻訳され始め、田山花袋、島崎藤村、永井荷風ら、自然主義の作家たちに影響を与えた。↓女の一生 ↓

脂肪の塊 ↓ペラミ

〔短編〕短編作家の名手モーパッサンには、『メゾン・テリエ』(一八八二)をはじめ、『フィフイ嬢』、『山鳴』(ともに一八八三)、『月の光』、『ロンドリ姉妹』、『イベット』、『ミス・ハリエット』(いずれも一八八四)、『トワヌ爺さん』(一八八六)、『ル・オルラ』(一八八七)、『ユッソン夫人の善行賞』(一八八八)、『あだなる美貌』(一八八九)などの短編集がある。

死後八〇年たつて、本国フランスでもモーパッサンの全短編が『ブレイアード叢書』二巻に収録され、出版された。同叢書の多くがそうであるように、各作品の初出年月日、パリアント(異本)、注が再検証され、多くの注を伴っている。これは、ある意味でモーパッサンの作品の再評価であると同時に、同国人にとってもモーパッサンの記述が、そのままでもわかるものではなくなってきたことを意味しよう。それは単に、ノルマンディーの田舎で用いられていた農具の名称、あるいは地名といった外面的なものに限らず、モーパッサンによって描かれている人物の行動や心理的反応そのものについても、ある程度あてはまるといえる。事実、夫に暖房器具を買ってもらえないので、わざと雪の中にほとんど裸で長時間とどまり、肺炎にかかることになって、消極的ではあるが夫に反抗する女性(『初雪』)とか、節約のため中風の夫に卵を抱かせて糞をかえさせるノルマンディーの農婦(『トワヌ爺さん』)といった存在が、そのままの形でどの程度、現代人の目に、ありそうなこと、あるいは、同情や笑いを誘う話として映るかは疑問である。さらに、一般に、冷静、客観的といわれる観察によって、地方の、あるいはパリの人間を、なにかもの珍しい人種でもあるかのように、読者にやや得意気に描いてみせる態度も、才気を感じさせるだけに、なにか古めかしい印象を与えることも少なくないだろう。

それにもかかわらずモーパッサンが、フランスでも外国でも読まれ続けているのはなぜだろう。たとえば、モーパッサンが戦争に題材を仰いだ短編をみよう。ふと平和なときに戻ったような気がして、釣り糸を垂れたがために銃殺されてしまった時計屋、小間物屋の主人たち(『二人の友』)、戦死した息子の復讐のため次々と村を占領している敵兵を殺していく農夫(『ミロン爺さん』)の存在は、けっして現代の

世界と無縁ではないだろう。当時の殺戮は、現代のそれと比べて規模の小さいものだったかもしれない。しかし、無力な個人が、個人を超えた途方もない力の前に、無力に踏みこたえられていく例は、今も昔も少なくない。そんなとき、あくまで個人の立場から戦争を糾弾するモーパッサンの声は、いまでも感動的である。これは、モーパッサン描く農民、パリ市民が一見平和な生活のなかで遭遇するドラマについてもいえるだろう。彼は『女の一生』に「ささやかな真実」という副題をつけたが、短編の多くについて、いまなお、われわれはその「ささやかな」人物の「ささやかな」悲喜劇を身近なものとして受け取ることができるのである。〈宮原 信〉

④新庄嘉章他訳『モーパッサン全集』全三巻（二六五～二六六・春陽堂書店）▽青柳瑞穂訳『モーパッサン短篇集』全六冊（新潮文庫）▽中

村光夫著『フロオベルとモウパッサン』（一九〇六・筑摩書房）▽大塚幸男著『流星の人モウパッサン——生涯と芸術』（一九七〇・白水社）

モハーベ砂漠 Mojave Desert

アメリカ合衆国、カリフォルニア州南部、シエラ・ネバダ山脈とデス・バリーの南方に位置する砂漠。グレート・ベースンの南端部を占める。面積約三万九〇〇〇平方キロメートル。標高六〇〇メートル。年降水量は七〇～一〇〇ミリ、夏の日中気温は二一～五一度Cである。サン・バーナーディノ山脈に発する河川は砂漠内で消える末無川で、塩湖を形成する。山と谷が幾重にも並行して分布し、山脈を隔ててロサンゼルス市が近い。〈鶴見英策〉

モハメッド ムハンマド

茂原(市) もばら 千葉県中部にある市。十九里平野南部に位置する。一九五二年（昭和二七）茂原町と鶴枝、五郷、二宮本郷、東郷、豊田の五村が合併して市制施行。七二年本納町を編入。東日本旅客鉄道外房線と国道一二八号、四〇九号が通じ、十九里平野南部の中心をなす。平安時代、興福寺領の荘園（藻原荘）が開かれ、中世には斎藤氏が領主となり、江戸時代は旗本領となった。一六〇六年（慶長一四）四、九の六斎市が開かれ、十九里浜の塩や海産物と十九里平野の農産物を交換し、町が形成された。また上総木綿も生産され江戸へ送られた。近年は天然ガスを原料・燃料とした近代工業が発達し、三井東圧化学、日立製作所などの大工場や下請工場が集中し工業化が進展

した。農業は米作とトマト、キュウリなどの野菜栽培をはじめ、台地上ではラッカセイが生産される。商業も近郊農村地域を背景に活発で、七月中旬に行われる七夕祭りは関東有数の規模である。千葉市に近いため住宅地開発も進み、人口が増加している。日蓮開基の藻原寺は東身延ともいわれ、背後の丘陵地に茂原公園があり、市民の憩いの場となっている。鶴枝ヒメハルゼミ発生地は国の天然記念物に指定されている。人口七万六九二九。〈山村順次〉

④『茂原市史』（九六・茂原市）

④地 二万五千分の一地形図「四天木」「茂原」「上総一宮」「海士有木」

模範議會 Model Parliament

一九五五年、イギリス王エドワード一世（在位一三二七～一三七一）が招集した議會。イギリスの議會は、王が聖俗の大貴族に国政や司法の重要問題を諮問する封建的集會の大会議に、一三世紀以降州や都市の代表が参加するようになり、しだいに形を整えていくが、この年の議會には、①大司教、司教、修道院長、②大貴族（伯などの諸侯）、③各州二名の騎士と各都市二名の市民、④副司教、付属修道院長以下の教区代表を含む下級聖職者が、参加し、その構成が当時の社会構成を「模範」的に代表していたためこの名がある。もともと、こうした地域代表参加の議會が恒常化するのには一四世紀前半エドワード二世の治世であり、また下級聖職者はこの議會には参集しなくなった。なお、「貴族院（上院）」「庶民院（下院）」の二院構成は一四世紀の間にしだいに明確となる。〈松垣 裕〉

モーパン嬢 Mademoiselle de Maupin

説。一八三五年刊。芸術美崇拜と理想の愛の夢をつづる書簡体小説。遍歴の騎士に扮して男性探求の旅に出た美少女マドレーヌ・ド・モーパンの「二重の愛」（副題）の物語。魅力的な愛人口ゼットとむつまじく暮らす詩人ダルペールは、たぐいまれな美貌のモーパン嬢に、少年のころから憧憬の的であった崇高な恋人をみいだす。一方、ロゼットも美しい騎士にひそかに恋心を抱く。こうした二重の三角関係のなかで、両性具有たるモーパン嬢は一夜、双方の愛に身を任せたと姿を消す。

なお、文学史上に有名な本書の「序文」は、芸術の目的は「美」以外には存在しないと主張し、文芸を人類の教化、福祉に資すべきとする

当時の批評界を激しく攻撃している。↓芸術のための芸術

④田辺貞之助訳『モーパン嬢』全二冊（新潮文庫）

モヒカン族 Mahican, Mohican

アメリカ合衆国、ニューヨーク州のハドソン川上流、キャッツキル山地に住んでいたアルゴンキン語族のインディアン。モヒカン族ともいう。モヒカンは「オオカミ」を意味する。世襲の首長に率いられた五集団に分かれていた。白人入植者やイロコイ族、モホーク族ら他のインディアンとの戦いの結果、人口が減り、一部はデラウェア族に吸収され、一部はマサチューセッツ州に移住し、ストックブリッジ・インディアンとよばれるようになった。その後ウィスコンシン州の保留地へ移った。〈板橋作美〉

モヒカン族最後の人

モビール mobile

現実の動きを伴う造形作品。従来までの彫刻は静止した像に運動感を暗示するが、実際に空間のなかで運動し、時間的持続において変化をみせる立体造形をいう。一般に動く美術作品を総称して「キネティック・アート」とよぶが、モビールは自然力、とくに風力や大気の微妙な振動に呼応して運動する作品をさす場合が多い。

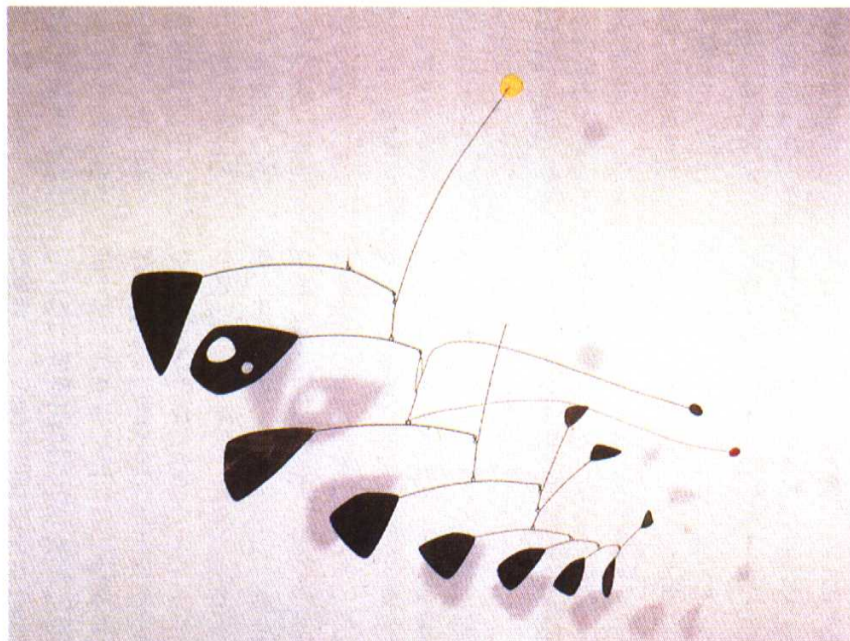
その原型はすでに一九一〇年代のソ連のタトリンやロドチェンコの実験にさかのぼることができるが、モビールの名称はアメリカの彫刻家コルダの動く造形作品をめぐって一九二三年に生まれた。「動く彫刻」の創造に専念して世間一般に広めたのはこの彫刻家であり、初期の二期を除けば、作品の多くは一点で支えられた針金による抽象構成が空中で微妙なバランスを保ち、わずかな大気の流れにも敏感に反応して絶え間ない運動による変幻を繰り広げる。そのモビールには、天井から吊るされる「ハンギング・モビール」、大地や床に設置される「ス

タンディング・モビール」の二形態があり、三次元の立体に時間軸を加えた四次元の芸術として二〇世紀美術の重要な変革の一つである。モビールの創造は多くの追従者を生み、今日では現代芸術の一領域を形成しており、純粋美術ばかりではなく、室内装飾や工芸デザインにも広く応用されている。↓コルダ

④『キネティック・アート』

モビール Mobil Corp.

エクソンに次ぐ世界第二位のアメリカの国際石油会社。一八八二年スタンダード・オイル・オブ・ニューヨークとしてニューヨーク州に設立。九九年から一九一一年までは同社全株式がスタンダード・オイル・カンパニー（ニュー・ジャージー州）によって所有されていたが、一年のスタンダード石油トラスト解体に関する最高裁判決とともに元の株主に配分された。三二年ソコニー・パキウム・コーポレーション、三四年ソコニー・パキウム・オイル・カンパニー、六六年モービル・オイル・コーポレーションに改称。その後七六年モービル・コーポレーションがデラウェア州法人として設立され、モービル・オイル・コーポレーションの全株式を一对一の比率でモービル・コーポレーション株と交換し、その持株会社となった。



モビール コルダ『赤と青の点のついたアンテナ』1960年 薄板メタル・針金  
ロンドン テート・ギャラリー それぞれの支点を左右に少しずつずらしてあるので、空気の微動によって形が変化する仕組み。メタルは普通、赤、青、黒など原色で色分けされ、空間に浮遊する色彩の効果を高めている